
夏の怖い話はなし

城間 奇成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の怖いはなし

【Nコード】

N8559C

【作者名】

城間 奇成

【あらすじ】

適当に私の中で浮かんだ短編物山に囲まれた小さな田舎に住む少女とその友達が起こす。思い出やら出来事など

私が、まだ小学5年の頃、私の村に遠く離れた北海道から引越して来た友達がいた。だが、そしてある夏の日、その子が家でカブトムシを捕まえたからぜひ見に来てくれと言われた。その子も私も女だけどせっかく誘われたから見に行くことにした。

ピンポン、私は、家について鐘を鳴らした。テレビでは、ここで自分の名前を叫んで鍵を開けてもらうわけだが私は、そんなことをしない。鐘を鳴らせばいいのだから

ガチャン、

「あらっ、いらっしやい」

その子のおばさんだ。まだ8月というのに長袖だ。だがその理由もすぐにわかった。

「加奈、お友達よ」

タツタツタツ、廊下を走る音がすると友達の加奈が階段の上からひよっこり顔を出した。加奈も夏だというのに長袖だ。

「あゝ待ってたよ。早く来て」

「あら、加奈今日友達と約束したの？」

「うん」

「そういうのは、先に行ってちょうだい」

「次からするよ」

加奈は、そういうと奥の自分の部屋に行ってしまった。

「ごめんなさいね。さあどうぞ上がって」

私は、そういうと靴を脱ぎ整えて入った。

「お邪魔します」

「礼儀がしっかりしてるのね」

私は、少し照れながら軽く会釈して階段を上がった。

「部屋は、わかるよね」

「はい、前に来た事ありますから」
「そう」

おばさんと別れて、加奈の部屋に向かった。

加奈の部屋にはいると何故親子揃って長袖なのかかった。

「寒っ何この部屋、エアコンかけすぎじゃない？」

「そうなの - 昨日壊れちゃってうまく調整できないの」

「じゃ止めればいいでしょう」

「だって外暑いし」

「なら他の部屋は？」

「それが、この家のエアコンはリビングで調整するのだけどそこが、壊れみたいで家全体が・・・」

だから、加奈もそのおばさんも長袖なのか・・・

「扇風機は？扇風機でいいじゃん家なんかクーラー使わないよ」

「扇風機？何それ」

「知らないの持ち運び出来るやつ」

「へ - 私の家今も前もないから」

「は - で、見せたいって言ってた甲虫は」

扇風機が、ない家があるなんて初めて知った。だけど家全体がクーラーがあるなんて、リビングに一台であり使わせてくれない家にたいしてなんか嫉みみたいだ。

「これこれ」

加奈は、机から虫かごを持ってきた。

「真新しいね」

虫かごは、昨日買ってきたのかまだ値札が張ってある。

「多分角がないから雌だと思っただよね」

私は、虫かごをのぞきこんだ。

「ツツツ!!」

確かに体は黒く角がない。だが虫に関して一切知識のない私でさえこれが甲虫ではないことがわかる。

「これね。一昨日の机の下にいたから思わず捕まえちゃった」

「こ、コレッ」

まじかでカサカサ動いている。顔を近づけてみたので思わず腰が抜けた。

「かわいいでしょ」

私は、顔を力強く振った。

「そうかな。よく見てよ」

そう言うとか奈は、虫かごに手を突っ込み加奈のいうカブトムシを取り出した。

私は、叫んでそれを止めたかったが恐怖で声がでない。

「はい」

加奈は、加奈のいうカブトムシを私に近づけた。そのカブトムシは、足をじたばたしている。

「これなんでも食べるんだよ。すごいよねハハハ」

「そうだよね・・・アハハハッ」

私は、あとづさりしながら下がった。私は、今までに加奈にして来た事に謝った。明らかに知っていながらやっているかもしれない。とりあえず謝ろう。

「ゴ、ゴメン。私が悪かったです」

「なんのこと？」

加奈は、なんの事だかさっぱりわかっていない。

「いたづ。噛んだ」

加奈から加奈の言うカブトムシが、手から離れ飛んだ。

「ギャー」

カブトムシは、私に目掛けて飛んで来たので私は、全速力で逃げた。カブトムシは、いや夏に出てくる大きな生きた化石の油虫は、私の横スレスレを飛んで行き壁についた。

一生懸命に部屋のドアを押した。

「どうしたの？トイレ」

私は、横野壁を見ると一目散に突っ込んでくる。カブトムシを見た。

「そのドアは、引きドアだよ」

私は、また腰が抜け思わず力いっぱい叫んだ。

「ギャー」

タツタツタツ、声に驚いて加奈のおばさんが部屋には行ってきた。私は、ドアに勢いよく飛ばされた。

「ここにいたのね」

何故かお母さんの手には、蠅叩きが・・・

バチンツ、床を移動していたカブトムシは、一撃で動かなくなつた。

腰が抜けて動けない私と大切にしていた虫を目の前で潰された加奈を尻目にお母さんは、かなり上機嫌だ。

「ごめんなさいね」

おばさんが、そういうと部屋を出ていった。潰された生きた化石は、微かに足を動かした。

「あつ」

「ギャ」

まだ生きている。タツタツタツ、おばさんがまた入って来た。手には、ゴミ箱から取って来たであろうボロボロのチラシがある。

そして、手際よくそれを包むと部屋のゴミ箱に捨ててしまった。

「ごめんなさい。さつきから騒がしくて、先週から探していてやっと見つかったの」

やっと私には、安堵の顔が戻って来た。それにたいして加奈は、今にも泣きそうだ。

「頑張つて生きてるのに小さくても・・・」

本来なら私は、ツツコミを入れたいが目の前で大切な物を殺されて・・・って今はそうではなくて！

加奈は、おばさんが、出ていくと小声で泣き出した。私は、どつと疲れた。

それから私は、加奈をあやした。

それから私は、加奈から生命の大切さなどいろいろ教わることに

があるが、ゴキブリは嫌いだ。

（後書き）

この話は、依然に誰からゴキブリを間違えてカブトムシと勘違いして飼っていたという話を私なりにアレンジした話です。

僕のたびも時間がありましたらぜひ読んで感想ください。

来年までに僕のたび第2章を投稿しようと思います。

それではまた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8559c/>

夏の怖いなし

2010年10月8日15時59分発行